平成９年12月８日第３種郵便物認可
令和７年11月30日発行（季刊発行）第169号

# HI

HAIKU INTERNATIONAL

2025
No.169

第二十七回ＨＩＡ俳句大会

俳句ユネスコ無形文化遺産
登録推進協議会

# HI

令和７年11月30日■第169号

Nov. 30. 2025■No.169

## 目　次　　CONTENTS


| | page | |
|---|---|---|
| 第二十七回ＨＩＡ俳句大会 | 2 | The 27th Haiku Contest |
| 俳　句 | | Haiku |
| HI 選集①スロベニア・カナダ・アメリカ・イラン・台湾・スウェーデン・内モンゴル・ドイツ・ヨルダン | 13 | HI Club ① Slovenia, Canada, U.S.A., Iran, Taiwan, Sweden, Mongolia, Germany, Jordan |
| HI 選集②～③ | 16 | HI Club ②～③ |
| HI 選集④（自訳） | 27 | HI Club ④ （translated by the author） |
| HI 169号 投句作品より 選評 HIA 理事　井上泰至 | 33 | From HI No.169 Selection and review by Yasushi Inoue, HIA Director |
| 俳句をユネスコ無形文化遺産に 岐阜県大垣市長　石田　仁 | 36 | |
| 【現代俳句2025年10月号より　転載】 俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会の設立と 俳句の定義について 筑紫磐井 | 37 | |
| 【「耕」2025年11月号編集後記より　転載】 俳句をユネスコに　加藤耕子 | 39 | |
| 会員コーナー　向瀬美音 | 40 | |
| 後記 | 41 | |

# 第二十七回ＨＩＡ俳句大会

**国際俳句協会賞**

驢馬の曳く荷の水甕の灼けてをり　世田谷区　池田のりを

**俳人協会賞**

塹壕に集ひ月夜の婚儀ミサ　秋田市　和田　仁

**現代俳句協会賞**

古書の街父の匂いと祭り笛　江戸川区　石綿　久子

**日本伝統俳句協会賞**

いつの日かここも海底彼岸花　奈良市　堀ノ内和夫

**日本経済新聞社賞**

あした採る人にも残し蕗の薹　夷隅郡　越川　悟

**ジャパンタイムズ社賞**

オアシスのもてなしに脱ぐ夏帽子　大阪市　西上　禎子

**俳句のまちあらかわ賞**

長江の男盛りの雲の峰　さいたま市　古郡　孝之

## 国際俳句協会賞

# 驢馬の曳く荷の水甕の灼けてをり

世田谷区　**池田のりを**

**【選評】**　掲句は「灼けて」が夏の季語。「水甕の灼けてをり」という描写は、今年の夏の尋常ではなかった暑さを思い出させる。驢馬で運ぶのは最近では珍しいかもしれないが、海外でも見られる景色だろう。広がりがあり、面白いところに焦点を当てた句である。

## 俳人協会賞

# 塹壕に集ひ月夜の婚儀ミサ

秋田市　**和田　仁**

**【選評】**　塹壕というのは防空壕のことか。今の日本では考えられないが、現在も戦争中のどこかかもしれない。戦争の最中にも、なんと塹壕のなかで婚儀が行われるのだ。月夜に集まり静かに結ばれるのも味わいがあり、写生の臨場感のある句である。大変な状況の中、おめでとうと言いたくなる。

## 現代俳句協会賞

# 古書の街父の匂いと祭り笛

江戸川区　**石綿　久子**

【選評】　まさに都会の夏のひとこま、であろう。「古書の街」というから、神保町の神田祭りだろうか。そこに、今はもういないであろう父の思い出が残っており、古本の街の祭の匂いが混ざりあう。父の「思い」を「匂い」としたところも思い切った表現で良い。祭笛が遠く聞こえてくる句である。

## 日本伝統俳句協会賞

# いつの日かここも海底彼岸花

奈良市　**堀ノ内和夫**

【選評】　日本各地が考えられるが、昔は海だった場所が今は陸地となって、彼岸花が咲いている。彼岸花は故人を偲ぶ花であるが、作者は花を眺めながら、「いつの日か」この地もそのうち海になってしまうかもしれないと、遠い未来の地球滅亡の危機も考えさせられる句である。彼岸花からの発想の飛躍が素晴らしい。

## 日本経済新聞社賞

# あした採る人にも残し蕗の薹

夷隅郡　**越川　　悟**

【選評】　優しい句である。蕗の薹を、全部採ってしまわずに、明日誰かが来て採るかもしれないと残しておく、という。達人の句である。蕗の薹を自分だけのものにしない、優しい心の持ち主に違いない。土筆だったら全部採ってしまうかもしれないが、「蕗の薹」が効いている。

## ジャパンタイムズ社賞

# オアシスのもてなしに脱ぐ夏帽子

大阪市　**西上　禎子**

**【選評】**　オアシスとは、砂漠の中、涼を求め、水を求めて人々が集まるところ。そこには噴水や氷などあるかもしれないが、季重なりを避けて、夏帽子に焦点をあてた。作者個人へだけではなく、様々な人へ「もてなし」がなされていることの思いがよく出ている。「夏帽子」により、暑い日常の中、ゆったりとしたもてなしの時間を楽しんでいる作者の様子がよく出ている。

## 俳句のまちあらかわ賞

# 長江の男盛りの雲の峰

さいたま市　**古郡　孝之**

**【選評】**　長江、揚子江に雲の峰が立っているという壮大な景色が広がる。まさに国際俳句の原点ともいうべき句。長江に立ち上がる雲の峰というのはとてつもない広がりのあるものだろう。そのどんどん伸びてゆく雲の峰の様子を、「男盛り」と言ったところが面白い。俳句はこのように、思い切ったものを思い切った言葉で思い切った場面を表現するものだ。非常によく描けている。

## 稲畑廣太郎選

### 特選

夕焼雲空に言葉を置くやうに　港区　青山ゆり
虫の音と車の音と闇の音　瀬戸市　野瀬めぐみ

### 入選

キリシタン灯籠裾に草茂る　金沢市　西田梅女
指切りの指に残りし檸檬の香　夷隅郡　越川悟
いつの日かここも海底彼岸花　奈良市　堀ノ内和夫
沖朧音無く高度下げる飛機　半田市　稲葉京閑
眠らずに聖夜の空を見詰める子　茅ヶ崎市　塚本治彦
黒鍵を弾く手の重し原爆忌　港区　青山ゆり
ため息も生きる力や生身魂　夷隅郡　岡西宣江
オアシスのもてなしに脱ぐ夏帽子　大阪市　西上禎子
ささらぎを青葉にのせて聞きにけり　夷隅郡　佐野志保子
露天湯を独り占めして銀河濃し　札幌市　熊谷佳久子

## 片山由美子選

### 特選

地上絵の上空サングラス外す　杉並区　田中あき子
オアシスのもてなしに脱ぐ夏帽子　大阪市　西上禎子

### 入選

竹の秋村はゆっくり老いにけり　さいたま市　古郡孝之
青き踏むアーリントンと言ふ墓苑　秋田市　和田仁
白服のレースが透けて港町　三田市　吉村玲子
髪洗うあしたという日があればこそ　夷隅郡　越川悟
古書の街父の匂いと祭り笛　江戸川区　石綿久子
ふる里の風をまとひて夕端居　夷隅郡　越川のり子
小鳥来るフランチェスコの説教に　札幌市　熊谷佳久子
片蔭や防犯カメラ作動中　深谷市　時田清
花こぶし大聖堂の朝の鐘　柏市　中川素子
月涼しグラスに浮かぶミントの葉　日立市　菊池幸恵

## 加藤耕子選

### 特選

長江の男盛りの雲の峰　さいたま市　古郡　孝之
ガンジーの手廻しの綿糸車　名古屋市　森　麓

### 入選

銀漢に抱かれ今宵の聖廃墟　秋田市　和田　仁
粽喰ふモンマルトルの赤提灯　秋田市　和田　仁
リンカンが寛ぐ椅子あり風薫る　秋田市　和田　仁
あした採る人にも残し蕗の薹　夷隅郡　越川　悟
沙弥僧の読経古刹に律の風　夷隅郡　越川　悟
長城のレンガ造りや鳥帰る　葛飾区　白塚告天子
ひとりっ子の詩人の詩集夜の長し　西尾市　鈴木　帰心
驢馬の曳く荷の水甕の灼けてをり　世田谷区　池田のりを
夏羽織ぬぎて佳境に入る噺　渋谷区　佐藤みちゑ
風渡る職員室の夏休　中野区　月城　花風

## 高野ムツオ選

### 特選

棄て畑に人語の記憶姫女苑　本巣市　小泉　裕子
土に生き土に還りし父の盆　夷隅郡　越川　悟

### 入選

古書の街父の匂いと祭り笛　江戸川区　石綿　久子
手で掬い冬の木洩れ日病床へ　夷隅郡　越川　悟
夏深し被爆マリアと平和の鐘　港区　青山　ゆり
夕焼雲空に言葉を置くやうに　港区　青山　ゆり
湖に映る森林碧き白夜かな　世田谷区　石橋万喜子
星涼し駱駝も馬も帰還民　宜野湾市　筒井　慶夏
地球にも始めと終り原爆忌　横須賀市　宮岡　弘
天の川いくさなき世を東西に　金沢市　宮田　勝
永久にあれ戦なき世の豆の飯　横浜市　高杉　桂子
風渡る職員室の夏休　中野区　月城　花風

## 中村和弘選

### 特選

| | | |
|---|---|---|
| 驢馬の曳く荷の水甕の灼けてをり | 世田谷区 | 池田のりを |

### 入選

| | | |
|---|---|---|
| 春浅し一村餓死の供養塚 | 夷隅郡 | 越川　悟 |
| 天高しツインタワーの建ちし処 | 奈良市 | 堀ノ内和夫 |
| リー将軍刻む岩山流れ星 | 深谷市 | 松山　芳彦 |
| ブーゲンビリア炎ゆる中庭ロルカ邸 | 小金井市 | 平井　葵 |
| たんぽぽやスクールバスの窓に鼻 | 川崎市 | 渡邉美奈子 |
| 墳丘にケバブの出店文化の日 | 大分市 | 羽野　泰子 |
| 炎帝の如レットバトラー少女の日 | 夷隅郡 | 内山千代子 |
| 大夏野雲の白さの石に座す | 宜野湾市 | 筒井　慶夏 |
| 海の風まつ正面にロカ岬 | 夷隅郡 | 岡西　宣江 |
| 妖精も人も出歩く白夜かな | 横浜市 | 小松　萌 |

## 能村研三選

### 特選

| | | |
|---|---|---|
| 有限を無限が包む銀河かな | 夷隅郡 | 越川　悟 |
| 炎帝の歪めてをりぬ時間軸 | 三田市 | 吉村　玲子 |

### 入選

| | | |
|---|---|---|
| 竹の秋村はゆっくり老いにけり | さいたま市 | 古郡　孝之 |
| 塹壕に集ひ月夜の婚儀ミサ | 秋田市 | 和田　仁 |
| 冬落暉鏡の如き未来都市 | 夷隅郡 | 越川　悟 |
| 言へぬ夢言はぬ夢あり水中花 | 港区 | 青山　ゆり |
| 風の過去風の未来に秋桜 | 港区 | 青山　ゆり |
| 心にも浮力のありて朝の虹 | 夷隅郡 | 越川　悟 |
| 万の声虚し戦火の空無月 | 世田谷区 | 杉﨑　邦子 |
| 遠つ世のざわめきに似て曼珠沙華 | 八王子市 | 沼田　博古 |
| 晩春の淡き鈍色ローランサン | 熱海市 | 菊池　恵海 |
| 夏羽織ぬぎて佳境に入る噺 | 渋谷区 | 佐藤みちゑ |

## 星野高士選

### 特選

| | | |
|---|---|---|
| 塹壕に集ひ月夜の婚儀ミサ | 秋田市 | 和田　仁 |
| あした採る人にも残し蕗の薹 | 夷隅郡 | 越川　悟 |

### 入選

| | | |
|---|---|---|
| いつの日かここも海底彼岸花 | 奈良市 | 堀ノ内和夫 |
| あと少し届かぬ平和しゃぼん玉 | 函館市 | 末永　玲子 |
| 国境に伏すヒマワリの安息日 | 小山市 | 神山　姫余 |
| 初蝶やつられ踏み入るけもの道 | 夷隅郡 | 佐野志保子 |
| 不夜城の都離れて青田風 | 夷隅郡 | 越川のり子 |
| つばくらの天を成したるコロッセオ | 秋田市 | 和田　仁 |
| 驢馬の曳く荷の水甕の灼けてをり | 世田谷区 | 池田のりを |
| 雁帰る羽根一枚の置手紙 | 夷隅郡 | 越川　悟 |
| 炎昼や多国籍語のエレベーター | 夷隅郡 | 越川　悟 |

## 和田華凛選

### 特選

| | | |
|---|---|---|
| 冬落暉鏡の如き未来都市 | 夷隅郡 | 越川　悟 |
| あと少し届かぬ平和しゃぼん玉 | 函館市 | 末永　玲子 |

### 入選

| | | |
|---|---|---|
| 長江の男盛りの雲の峰 | さいたま市 | 古郡　孝之 |
| 地球儀にエデンを探す夏休み | 夷隅郡 | 越川　悟 |
| いつの日かここも海底彼岸花 | 奈良市 | 堀ノ内和夫 |
| 土に生き土に還りし父の盆 | 夷隅郡 | 越川　悟 |
| 新松子蹴りて少年声変はり | 入間市 | 中武　純子 |
| 心にも浮力のありて朝の虹 | 夷隅郡 | 越川　悟 |
| 蒼空へ碧き朝顔たち登り | 瀬戸市 | 野瀬めぐみ |
| なんとなく生きてしまひぬ木瓜日和 | 夷隅郡 | 岡西　宣江 |
| ゲルニカは遠き日ならず花柘榴 | 熱海市 | 菊池　恵海 |
| 邯鄲や戻られぬ道振り返る | 夷隅郡 | 岡西　宣江 |

## 英語俳句　選評 / Haiku from overseas - Selection and Review

ディヴィッド・バーレイ 選（Selected by David Burleigh）

### 特　選（Prize Winners）

Chen-ou Liu（Canada）
●
**trade war news**
**a spiderweb on the eaves**
**sagging with raindrops**

チェンオウ・リウ（カナダ）
●
貿易戦争のニュース
軒先の蜘蛛の巣
雨粒でたわむ

一行目は明らかに時事的な、今まさに懸念される事柄で、それに続く個所は自然の中で観察されたものです。蜘蛛の巣は、おそらく詩人の家の軒先にあって、重い雨粒がその巣を破壊しかけています。巣は蜘蛛の住処で生きる手段ですが、やがて崩れそうです。われわれの人生もまた繊細に紡がれても、簡単に断ち切られることがあります。巣が落ちてしまうまでのしばらくの間は、きらめく雨粒に屈折する光がきれいだと感じられるでしょう。音節数は３-７-５となっています。

The first line is clearly topical, a concern of the moment, while what follows is natural, observed. The spider's web is, I imagine, on the eaves outside the poet's house, where the heavy raindrops gather and threaten to destroy it. The web is the spider's lair and means of existence, yet one that may soon give way. Our lives too are delicately wrought, and may be easily disrupted. In the meantime we can admire the light refracted in the glittering raindrops, before they fall. I note the syllable count of 3-7-5.

Ibrahim Nureni（U.S.A.）
●
**proxy war**
**a soldier's uniform**
**on the scarecrow**

イブラヒム・ヌレニ（アメリカ）
●
代理戦争
軍服が
かかしに

戦争をテーマにした俳句は今回二つあって、どちらもかかしをモチーフにしたものでした。もう一方（セルビアからの作品）は、この作品のような軍服ではなくヘルメットを被っていました。こちらの俳句が優れている点は、冒頭の表現にあるように思われます。それは､戦争というものが直接関与する国々だけでなく、個々の意図を持った別の国の支援によっても行われることを想起させるからです。すべてが奪われてしまったかのようにも見えますが、中心にある意味は曖昧なままに、読者に解釈が委ねられています。

There were actually two haiku on the subject of war, both with the image of a scarecrow, the other (from Serbia) wearing a helmet rather than a soldier's uniform as here. What gave this one the edge, it seemed to me, was the opening phrase, which reminds us that wars are not only fought by the countries directly engaged, but with the support of other countries, that have their own intentions. The meaning of the central image is left ambiguous, for the reader to assign, even as it appears to be utterly bereft.

## 木村聡雄選（Selected by Toshio Kimura）

## 特　選（Prize Winners）

Kanchan Chatterjee（India）
●
**flapping hand fan —**
**grandpa's hunting stories**
**continue**

カンチャン・チャタルジー（インド）
●
団扇であおぎ —
おじいちゃんの狩りの話は
続く

冒頭の「団扇」からすぐに家族の情景が浮かんでくるようです。おそらくおじいちゃんの若い時分の話でしょうが、孫はもちろん興味しんしんです。とはいえ最後の「続く」という表現が、しばらく聞いていた後の聞き手の心の奥を物語っています。面白い話でも長すぎるのはどうでしょうか。孫は、まだまだ長くなりそうだな、と感じ始めているとも読めるでしょう。そんなユーモアも感じられる作品です。

The opening phrase “flapping hand fan” immediately evokes the family scene. It would be stories of Grandfather's young days, and the grandson is naturally fascinated. Yet the final word, “continue”, hints at the grandson's inner thoughts some time later. However interesting stories may be, what if they are too long? We can imagine that the grandson is beginning to feel that this is likely to drag on for quite some time yet. This haiku has such humor.

Alan Summers（U.K.）
●
**day of vinyl records**
**the sprawling ivy rotates**
**into its own past**

アラン・サマーズ（イギリス）
●
レコードの一日
伸びる蔦は
自分の過去に巻きつく

配信で音楽を聴く人が増えるなか、レコード派もまだまだ多いとも言われます。CD もそうですが、休日などに、ジャケットからレコードを取り出してプレーヤーにセットし、聴き終わったらしまって、また次のレコードを選ぶという儀式はまた楽しいものでしょう。おそらく、かつてよく聴いたこの曲やあの曲. . . 。この句からそんな想像をしていると、２行目以降の蔦の描写も作者の分身のように生き生きと感じられてきます。おそらく読者もかつてのお気に入りの音楽を聴くと、この蔦になった気がしてくるような作品でしょう。

Though more people listen to music via streaming services, it is said that vinyl enthusiasts remain numerous. Much like with CDs, on a day off the ritual of taking a record out of its sleeve, setting it on the player, putting it away when finished, and selecting the next one is rather enjoyable. Probably, those songs, once listened to so often.... Imagining such things from the first line makes the description of the ivy in the following lines feel vividly alive, like a part of the author. Listening to old favorite music, readers would feel as though they have become this very ivy.

## 入　選（Honorable Mentions）/ ディヴィッド・バーレイ選（Selected by David Burleigh）

Amir Kapetanović（Croatia）
●
**fisherman's gaze**
**pulls in the heavy nets**
**of leaden clouds**

アミル・ケペタノヴィク（クロアチア）
●
漁師の眼差し
鉛色の雲の
重い網を引く

Eduard Tara（Romania）
●
**telegraph poles —**
**only the moon settles**
**on the missing wire**

エドワルド・タラ（ルーマニア）
●
電柱 —
月だけが
途切れた電線に

Richard L. Matta（USA）
●
**fall stairwell**
**a crow's long caw**
**lengthens it**

リチャード・マッタ（アメリカ）
●
秋の階段吹き抜け
カラスの長い鳴き声が
その吹き抜けを伸ばす

Zoran Doderović（Serbia）
●
**distant bells**
**blackbird's song**
**uninterrupted**

ゾラン・ドゥデロヴィク（セルビア）
●
遠い鐘
黒歌鳥の歌は
途切れず

## 入　選（Honorable Mentions）/ 木村聡雄選（Selected by Toshio Kimura）

Silva Trstenjak（Croatia）
●
**autumn equinox —**
**the Moon half full**
**half empty**

シルヴァ・トゥルステニャク（クロアチア）
●
秋分 —
月は半分満ちて
半分欠けて

Zoltan Pachnik（Hungary）
●
**calm sea**
**stars looking for**
**their own images**

ゾルタン・パチニク（ハンガリー）
●
海静か
星々は
自分の姿を探す

Marek Kozubek（Poland）
●
**after a quarrel —**
**discovering the silence**
**in a nightingale's song**

マレク・コズベク（ポーランド）
●
喧嘩のあと —
小夜啼き鳥の歌に
静寂が

Kat Lehmann（U.S.A.）
●
**as if**
**no one knows**
**fawn season**

カト・レーマン（アメリカ）
●
半獣神の季節と
誰も知らない
かのように

## —— HI Club —— ①

STOPAR, Rudi（SLOVENIA）
●
Euphrates' water
above the little houses
flies a bald

HRYCIUK, Marshall John Louis（CANADA）
●
seed fluff runs aground
bobs back up
a swirl of sparrows

KURODA, Motoko（U.S.A.）
●
Happily I found Bill's voice
on the answering phone
on a spring evening

MORTAZAVI, Milani S. Mohsen（IRAN）
●
desperately looking for a nest
a pair of white-eared nightingales
I wish I were that nest

LEE, Che-Yu（TAIWAN）
●
Parent and child
Eastern spot-billed ducks
Pausing at the red light

HAFERNIK, Johnnie Johnson（U.S.A.）
●
lazy afternoon
outside an ice cream shop
chirping sparrows

## —— HI 選集 —— ①

ストパール，ルディ（スロベニア）
●
ユーフラテス川の水
小さな家々の上
ホオアカトキが飛ぶ

リチューク，マーシャル　ジョン　ルイス（カナダ）
●
種子の綿毛は飛び回り
ひょいと戻ってくる
スズメの乱舞

黒田素子（アメリカ）
●
留守電の
亡夫のテナー
春の宵

（自訳）

モルタザフィ，ミラーニ S. モセン（イラン）
●
必死に巣を探す
ナイチンゲールのつがい
あの巣になってあげたい

李　哲宇（台湾）
●
軽鴨の
親子とどまる
赤信号

（自訳）

ハフェルニック，ジョニー・ジョンソン（アメリカ）
●
気だるい午後
アイスクリーム屋の外で
鳴くスズメ

MOMOI, Beverly Acuff（U.S.A.）
●
winter chill
the short-tailed cat leads the way
to the hot spring

桃井，ベバリー（アメリカ）
●
冬の寒さよ
しっぽの短い猫が
温泉へ導く

（訳：桃井勝彦）

MACHMILLER, Patricia J.（U.S.A.）
●
oysters dream
to the sound of the surf
the origin of forgiveness

マクミラー，パトリシア　J.（アメリカ）
●
牡蠣が夢見る
波の音
赦しの起源

LINDSTRÖM, Anneli（SWEDEN）
●
The sunflower
find shells
at the seashore

リンドストローム, アネリ（スウェーデン）
●
ヒマワリは
海岸に
貝殻を見つける

SHIMANE, Marie Annette（JAPAN / U.S.A.）
●
The crows －
their cries and the heat
increase

シマネ，マリエ　アネッテ（日本 / アメリカ）
●
カラスたち
気温とともに鳴き声も
高くなる

Khargui（Inner Mongolia）
●
The more I gaze,
the more star-friends
appear

ハルゴイ（内モンゴル）
●
見つめるほど
星々の仲間
増えている

M. Tsetsenbaatar（Inner Mongolia）
●
While sun-drying things,
composing a haiku －
suddenly, it’s spring

M. ツェツェンバートル（内モンゴル）
●
天道干しに
句作
気づけば春だ

Y. Jargaldalai（Inner Mongolia）
●
Wind, don’t touch
the kissed lips
of my beloved

Y・ジャルガルダライ（内モンゴル）
●
風よ触れるな
愛しき君に
キスした唇に

Bar Bold（Inner Mongolia）
●
Sleepless night
the light from my smartphone
licks my face

バー・ボルドー（内モンゴル）
●
不眠の夜
スマホの光に
顔舐められる

DOI, Gisela（GERMANY / JAPAN）
●
Spaziergang am See －
die kleine Schildkröte treibt
durch Wolkenspiegel

土井 , ギーゼラ（ドイツ / 日本）
●
湖畔ゆく
水面の雲を
漂う小亀

（自訳）

WAZWAZ, Issam（JORDAN）
●
A charm ...
the old woman’s speech
mixed with her yawning!

ワズワズ , イッサム（ヨルダン）
●
魅力的な
老婦人のスピーチ
あくび混じりの！

◇ ◇ ◇

## —— HI 選集 —— ②

安原　葉（長岡）
●
山住みの宵の家路や初蛍

古郡孝之（埼玉）
●
一歩よりはや梅林の風匂ふ

新田佐代子（堺）
●
春愁や励ます言葉ひとり言

和田　仁（秋田）
●
ミサ曲を包み込んだる花吹雪

介弘紀子（福岡）
●
世を捨てし人と海見て日向ぼこ

岡西宣江（千葉）
●
しんどさも生きてるあかし生身魂

## —— HI Club —— ②

YASUHARA Yo
●
Living in the mountains
the road home at dusk —
first fireflies

FURUKORI Takayuki
●
The scent of a plum grove
already in the air
from the first step

NITTA Sayoko
●
Spring melancholy —
words of encouragement
I speak to myself

WADA Jin
●
Cherry blossom showers
encompassing
the sound of the mass

SUKEHIRO Noriko
●
Watching the tide
with a world-renouncer...
basking in the sun

OKANISHI Nobue
●
Weariness, too
is proof of being alive
honoring elders at Obon

北端辰昭（奈良）
●
憩ふにも傾斜地ばかり梅の里

KITABATA Tatsuaki
●
Although trying to relax
there's nothing but slopes
in this plum blossom village

草野准子（東京）
●
われならば掻くことのなき春の雪

KUSANO Junko
●
If it were me
I'd never remove
this fleeting spring snow

鈴木帰心（西尾）
●
清明や散華に鳥語加はりぬ

SUZUKI Kishin
●
Clear and bright —
the language of birds joins
the scattering flowers

神山姫余（栃木）
●
まなかいの赤子声編む聖五月

KAMIYAMA Himeyo
●
In my gaze
a baby knits its voice
Holy May

大西政司（愛媛）
●
北口を出れば初夏燧灘

ONISHI Masashi
●
Stepping through the north exit:
early summer unfolds
over Hiuchinada

永井玲子（神奈川）
●
人力車の赤き膝掛け花の冷え

NAGAI Reiko
●
A red lap blanket
for a rickshaw ride —
cherry blossom chill

今泉かの子（名古屋）
●
瑠璃蜥蜴しなやかに出づコロッセオ

IMAIZUMI Kanoko
●
A lapis lazuli lizard
slips into view...
the Colosseum

三好かほる（埼玉）
●
燕来る子規球場の空高く

MIYOSHI Kahoru
●
Swallows arriving
high above a ballpark
named for Shiki

原田静子（埼玉）
●
夏初め家庭菜園朝マック

HARADA Shizuko
●
Summer begins —
homegrown greens
and a McDonald's breakfast

田代まれすけ（静岡）
●
ひたむきに生きて美し散紅葉

TASHIRO Maresuke
●
Lived earnestly
autumn leaves falling
beautifully

福原詠風子（函館）
●
中天に鳶輪を描き春兆す

FUKUHARA Eifushi
●
A black kite draws
a circle high in the air...
hints of spring

清水みな子（刈谷）
●
針槐（はりえんじゅ）の花簪の五月来る

SHIMIZU Minako
●
May arrives —
Floral hairpins blooming
on false acacia

草刈幸風（東京）
●
早苗饗や単線向ふ露天の湯

KUSAKARI Kofu
●
Feast after rice planting —
a single railroad track leads
to an outdoor onsen

逸見真三（千葉）
●
冬の凪舟唄流れる浜酒場

HENMI Shinzo
●
Winter lull —
a beachside bar
drifting with “Funauta”

西田梅女（金沢）
●
片方の角で見てゐるかたつむり

NISHIDA Umejo
●
A snail
watching the world
with a single horn

鈴木慕南（東京）
●
薔薇園に集ふ人みな一家言

SUZUKI Bonan
●
Gathered in the rose garden
each person with an opinion
on roses

羽野泰子（大分）
●
薬効くまでの一刻梅雨の闇

HANO Yasuko
●
A moment
before the medicine starts to work...
rainy season gloom

草野章次（浜松）
●
夏の雲閃光一過黒い雲

KUSANO Shoji
●
Summer clouds
after a flash of light
black clouds

坂田節子（埼玉）
●
青田風ドローン除草の低飛行

SAKATA Setsuko
●
Green rice-field wind —
a drone flies low
weeding

權守いくを（神奈川）
●
異国の砲火案ぜし紙鳶

GONNOKAMI Ikuo
●
A paper kite —
worried about cannon fires
in foreign skies

井坂　宏（東京）
●
黒南風や開き干さるる深海魚

ISAKA Hiroshi
●
Dark south wind —
deep-sea fish split
and sun-dried

桂香（函館）
●
若葉風ワインの庫からチェロの音

KEIKA
●
Young-leaf breeze —
the sound of a cello coming
from a wine cellar

石井洋子（三重）
●
炎天に挑むクレーンや造船所

ISHII Yoko
●
Cranes
challenge the scorching sun —
a dry dock

安富明路（北海道）
●
息づかいの映ゆるかなもじいとやなぎ

YASUTOMI Akiji
●
*Kana* letters
carry the writer's breath...
weeping willows

西上禎子（大阪）
●
爆音をものともせざり通し鴨

NISHIGAMI Teiko
●
Settled ducks
unmoved
by the roar

月城花風（東京）
●
大夕焼水平線に孤舟あり

TSUKISHIRO Kafu
●
Great evening glow...
a solitary boat
on the horizon

菊池熱海（東京）
●
潮騒やクレッシェンドの夏来る

KIKUCHI Nekkai
●
The sound of waves —
summer arrives
in a crescendo

菊池恵海（東京）
●
老鶯に偲ぶ師の恩熱海句座

KIKUCHI Keikai
●
Summer bush warbler —
remembering our master's benevolence
Atami haiku gathering

上村凡次（函館）
●
青梅雨にやすらぎうける蓮の花

KAMIMURA Bonji
●
Early summer rain...
lotus blossoms receive
a share of calmness

## —— HI 選集 —— ③

渡辺通子（日立）
●
鳰ばかり追うてだんだん眠くなり

西邑桃代（京都）
●
木下闇美味なる餅はねず色

佐藤宣子（北海道）
●
面識のある浜人にもらふ海胆

田中あき子（東京）
●
肝移植の兄に世の風また薫る

齋藤澄子（東京）
●
透き通る都心の杜に聞く初音

清水暁子（北海道）
●
ふきのとうレシピと双（なら）び道の駅

## —— HI Club —— ③

WATANABE Michiko
●
Chasing only grebes...
slowly growing
sleepy

NISHIMURA Momoyo
●
Deep tree shade —
the most delicious *mochi* is
pale vermilion

SATO Nobuko
●
Sea urchin
a gift from a fisherman
whom I know

TANAKA Akiko
●
For my brother
after his transplant — the world's breeze
scented again

SAITO Sumiko
●
So clear and limpid...
the sound of the first bush warbler
I hear in the city center

SHIMIZU Akiko
●
Butterbur sprouts
next to recipes...
rest stop

馬場吉彦（盛岡）
●
補聴器にたよる日々かな囀れり

Baba Yoshihiko
●
These days
relying on a hearing aid —
birdsong

佐藤みちゑ（東京）
●
春光をすくひて進む渡し舟

SATO Michie
●
A river ferry
glides while gathering
spring light

平井　葵（東京）
●
黒揚羽微動だにせず志士の墓

HIRAI Aoi
●
A black swallowtail
perfectly still upon the grave
of a *Bakumatsu* patriot

飯川三無（川崎）
●
糸切れし風船に空広すぎる

IIKAWA Sanmu
●
A sky too vast
for a balloon
without its string

時田　清（深谷）
●
青春の香を束ねをりアマリリス

TOKITA Kiyoshi
●
Bundling up
the fragrance of youth
amaryllis

細川みちえ（愛知）
●
麦秋の河口に鳥のつと潜り

HOSOKAWA Michie
●
Wheat harvest
birds dive at the river mouth
all at once

相沢正志斎（茨城）
●
廃校の一階二階燕の巣

AIZAWA Seishisai
●
An abandoned school's
first and second floors
swallows' nests

児玉星流（長野）
●
人間喪失変わる社会紫陽花の色

KODAMA Seiryu
●
Humanity lost
in a shifting world;
color of hydrangeas

葛生みもざ（東京）
●
短夜のゆるりと流るファド聴かば

KUZUU Mimoza
●
The short night flows
slowly
as I listen to fado

石綿久子（東京）
●
ひとりづゝ友の訃報や虹の橋

ISHIWATA Hisako
●
One by one,
news of friends' deaths —
rainbow's bridge

筒井慶夏（沖縄）
●
白百合の全き白をふと怖れ

TSUTSUI Keika
●
Suddenly
fearing the flawless white
of a white lily

ちづこ（東京）
●
青葉山鳥の言葉を聞き分けて

CHIZUKO
●
Verdant mountain
understanding
the language of birds

川口比呂人（鎌倉）
●
梅雨夜明け秒針重く時刻む

KAWAGUCHI Hiroto
●
Rainy-season dawn
the second hand
ticks heavily

相沢恵美子（横浜）
●
株ごとに一族めきて濃紫陽花

AIZAWA Emiko
●
Bush by bush
each like a family
rich-colored hydrangeas

椙原夢乃（周南）
●
山茨（やまうばら）一面みどりなる風よ

SUGIHARA Yumeno
●
Wild roses —
a verdant breeze
blows across them

宮田　勝（石川）
●
曲乗りの子らのまはりを夏の蝶

MIYATA Masaru
●
Summer butterflies
circling the kids
doing bicycle tricks

髙橋紀美子（神奈川）
●
横浜にゆずの香りの白ビール

TAKAHASHI Kimiko
●
Found a white beer
flavored with yuzu
in Yokohama

福田ひさし（埼玉）
●
造成地最後の田より青田風

FUKUDA Hisashi
●
Housing development —
from the last rice paddy
a verdant breeze

水田博子（広島）
●
丸洗ひ白雨過ぎゆく小富士かな

MIZUTA Hiroko
●
Little Fuji —
summer rain passing,
washing the world clean

矢野真緋子（広島）
●
万華鏡にまぎれ入りしか薔薇の園

YANO Mahiko
●
Rose garden:
am I slipping into
a kaleidoscope?

菊池幸恵（茨城）
●
花冷えの小さく畳む手紙かな

KIKUCHI Sachie
●
A letter
folded small —
blossom-time chill

木下さとし（三田）
●
おばあちゃんの唄を詩にし子沖縄忌

KINOSHITA Satoshi
●
A boy turned
his grandma's song into a poem —
Okinawa Remembrance Day

田中由子（神戸）
●
亀の子や首伸ばしきて昼寝覚め

TANAKA Yoshiko
●
A baby turtle
stretching its neck
as it awakes from a nap

（HI 選集①～③
村上博幸訳）

（HI club ①～③
Translation by
Hiroyuki Murakami）

## —— HI 選集 —— ④

悟（愛知）
●
デイケアの短き出会ひ春の雪

陽二（西蒲田）
●
豆まきやバナナ一本昼餉かな

結菜やよひ（神奈川）
●
よそとせの記憶纏ひし雛人形

松山芳彦（埼玉）
●
関税の舌刺すディール芽山椒

チョウコ　ビーン（熱海）
●
春昼や亀の親子は甲羅干す

末永玲子（北海道）
●
飛ぶ鳥ら空の一角春匂ふ

## —— HI Club —— ④

SATORU
●
A brief acquaintance
at the day-care
fine spring snow

YOJI
●
bean-throwing festival
eats a banana for lunch
beginning of spring

YUNA Yayohi
●
with the memories
of forty years
hina dolls

MATSUYAMA Yoshihiko
●
A customs deal
that pricks the tongue
shoots-sansho

BEEN Choko
●
spring midday
a turtle family
drying their shell

SUENAGA Reiko
●
flying birds
a corner of the sky
the smell of spring

工藤眞一（東京）
●
被り直す帽子目深に春落葉

KUDO Shinichi
●
Den Hut setze ich wieder
tief ins Gesicht gezogen auf —
Laubfall im Frühling

池田松蓮（東京）
●
ほどほどに支えられつつ蝌蚪の紐

IKEDA Shoren
●
Casi sostenidos
huevos
de rana flotan

川原千秋（東京）
●
風と共に去りぬやハンカチの花

KAWAHARA Chiaki
●
Gone with the Wind
A handkerchief
flower

小泉裕子（岐阜）
●
どこまでも陽炎と往く路線バス

KOIZUMI Yuko
●
a bus on its regular route
goes with a shimmer of hot air
endlessly

山田由紀子（仙台）
●
新緑や遺影の母は微笑みて

YAMADA Yukiko
●
Mom smiles
in the photo
fresh greenery

望月吉々（北海道）
●
三歳の吟行ごっこ緑立つ

MOCHIZUKI Yoshi-yoshi
●
Repa-ponekaci
Haykay-eomanan-sinot
Sunku-asir-nikom

ヘンリー殿様（東京）
●
心電図乱れもあらず今朝の秋

HENRY Tonosama
●
Un électrocardiogramme
ne se dérègle pas
au début de l'automne

小松　萌（横浜）
●
階段がランチの座席夏近し

KOMATSU Moe
●
seated
on the step for lunch,
summer draws near

永井弘子（茨城）
●
梅雨明や郵便受けによき知らせ

NAGAI Hiroko
●
The rainy season is over,
there is nice letter
in the letter box

幸湖（滋賀）
●
躊躇なく席譲る子や涼しき目

KOUKO
●
Un garçon a cédé
sa place sans hesitation
les yeux limpides

祚胤（函館）
●
一切のノルマを解いて春卆寿

SOIN
●
solving all quotas
90th birthday
in spring

乃万美奈子（愛媛）
●
老人は本心云わない古団扇

NOMA Minako
●
Old persons never tell
own true feeling
old fan

竹うち悦子（神奈川）
●
声のみな大きふるさと青田風

TAKEUCHI Etsuko
●
that loud voice everyone has
in my hometown
— breeze through the green rice field

山戸暁子（堺）
●
若きらの長き手脚や夏近し

YAMATO Akiko
●
Der jungen Menschen
lange Arme und Beine...
der Sommer kommt bald

小上栄女（和歌山）
●
美術館の横に大池緑立つ

OGAMI Shigejo
●
a vast pond
right at the Art Museum
lush green trees

久永小千世（知立）
●
薔薇盛り彼が窓辺を吾が位置となし

HISANAGA Sachiyo
●
Roses in full bloom
this window that was his seat
now is my seat

中村和江（深谷）
●
散髪の子の大あくび薄暑かな

NAKAMURA Kazue
●
A boy's big yawn
during his haircut
the beginning of summer

相木英人（東京）
●
花嫁の進む境内五月晴

AIKI Hideto
●
the June bride walks
wearing a silk floss headdress
sunny shrine —

小野香久子（東京）
●
碎けつつプールに映る万国旗

ONO Kakuko
●
on the swimming pool
shadows of the flags of all nations
being shattered and crushed

白根順子（埼玉）
●
読み終えし古典の余韻虹立ちぬ

SHIRANE Junko
●
The afterglow of the classics
that I finished reading
— Big rainbow —

山本浪子（川崎）
●
滝落ちて目指すは一路地中海

YAMAMOTO Namiko
●
A waterfall begins
to take a long trip
to the Mediterranean

岡　哲夫（和歌山）
●
笛吹いて自転車で来る氷菓売り

OKA Tetsuo
●
blowing a whistle
coming on a bike
an ice cream vender

各務恵紅（岐阜）
●
騙し絵の如き街並み月朧

KAKAMI Keiko
●
The townscape
looks like a trompe l'oeil —
hazy moon

天野松男（福岡）
●
実梅もぐ世界は戦禍重ねたり

AMANO Matsuo
●
plucking ripe plums —
this world layers the sorrows
of war again

毬矢まりえ（東京）
●
パスカルと名付く青蜥蜴半眼

MARIYA Marie
●
a blue lizard
eyes half closed
— named Pascal

内村恭子（東京）
●
やや熱中症ブロンズの英雄像

UCHIMURA Kyoko
●
suffering slightly
from heat stroke —
a bronze hero

## 俳句ユネスコ登録推進運動支援のお願い

世界で一番短い詩
HAIKU
俳句をユネスコへ

◎年会費　（４月～翌年３月）
　　個人：　1,000円
　　団体：　10,000円（結社・俳句同好会）

◎寄　附　任意のご寄附を随時受け付けています（一口1,000円～）

◎振込先　口座名：俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会
　ゆうちょ銀行　　振替口座　00100－１－420695
　　（郵便局よりお振込の場合）
　ゆうちょ銀行　　019支店　当座預金　0420695
　　（銀行よりお振込の場合）

俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会事務局　（国際俳句協会内）
〒162－0843 東京都新宿区市谷田町 2－7 東ビル７F
Tel:03-5228-9004 Fax:03-5228-9007 HP:https://unesco.haiku-hia.com/

## ―HI 169号 投句作品より / From HI No.169―

**【選評】**

**HIA 理事　井上泰至**

**Selection and review by Yasushi Inoue, HIA Director**

**■第 1 位■**

筒井慶夏（沖縄）/ TSUTSUI Keika

白百合の全き白をふと恐れ
Suddenly / fearing the flawless white / of a white lily

（評）白は色んなイメージを受け止められる。空白の色だからだ。「ふと」とは、突然に、というより、無意識から「怖い」という意識は浮かんできたという意味である。純白とは無垢であるが、高潔からあるかたくなさも感じられなくはない。日本語で「白黒をつける」とは、正邪の線引きを明確にするという意味である。白は厳正なものでもあり、結果怖くなるものでもあるのだ。

White can hold many images. It is the color of blankness. “Suddenly” here means not so much an abrupt occurrence, but rather the awareness of ‘fear’ emerged. While pure white signifies innocence, it also carries a certain rigidity born of nobility. In Japanese, “drawing a line between black and white” means clearly defining the boundary between right and wrong. White is both a symbol of strictness and, consequently, something that can inspire fear.

**■第 2 位■**

飯川三無（川崎）/ IIKAWA Sanmu

糸切れし風船に空広すぎる
A sky too vast / for a balloon / without its string

（評）糸の切れた風船は、自由になった。しかし、自由ほど孤独で不安なものもない。人は自由を欲しがるが、自由だけで幸せになれるわけではない。風船はもう誰も頼ることはできない。「広すぎる」自由な空を漂っていくだけ、自分の意志などその広さの中では、何の力もない。束縛のない世界とは、こんなに空虚なものである。

The balloon, its string cut, is free. Yet nothing is as lonely and unsettling as freedom. People want freedom, but freedom alone does not bring happiness. The balloon could no longer depend on anyone. It drifts through the “too vast” free sky, but itself is powerless within that expanse. A world without bonds is this utterly empty.

**■第 3 位■**

LINDSTRÖM, Anneli（Sweden）/ リンドストローム , アネリ（スウェーデン）

The sunflower / find shells / at the seashore
ヒマワリは / 海岸に / 貝殻を見つける

（評）S 音の連続が、「乾いた」風と海岸を想起させる。貝殻も身がないのだから「乾いた」心持ちなのだと思われる。日本語で「乾いた心」というと、欲得ずくの砂を噛むような味気ないイメージが浮かぶが、ここは湿気のない見通しのいい海岸の爽やかな気分を想起すればいい。湿度の高い日本にはないが。

The succession of S sounds evokes a “dry” wind and the coast. Since the shells are empty, one imagines a ‘dry’ feeling. In Japanese, “dry heart” conjures an image of something tasteless, like chewing sand without desire, but here, one should recall the refreshing mood of a clear, unobstructed coast devoid of humidity. Something Japan’s high humidity lacks.

**■第 4 位■**

西田梅女（金沢）/ NISHIDA Umejo

片方の角で見てゐるかたつむり
A snail / watching the world / with a single horn

（評）「かたつむり」が世界を知る術は、あの角にある。よく見ると、二つの角は同じ方向を向いているとは限らない。遅々とした歩みを止めて、この先を探るように、片方のみ動いている「角」を通して、かたつむりと一体化した作者の心、その対象への愛がこちらに伝わってくる。梅雨の合間の晴日か。

The snail's way of knowing the world lies in those horns. Look closely, and you'll see the two horns don't always point in the same direction. Pausing its slow progress, as if probing ahead, the snail's heart—now one with the author's—and its love for its subject reach us through the single horn that moves. It might be a sunny day in the rainy season.

**■第５位■**

三好かほる（埼玉）/ MIYOSHI Kahoru

燕来る子規球場の空高く

Swallow arriving / high above a ballpark / named for Shiki

（評）日本に野球がもたらされた頃、夢中になった若者の一人に正岡子規がいた。日本の俳句をリニューアルしたレジェンドだ。今東京上野に子規の名を顕彰した球場がある。いい意味で稚気があり、歴史に名前を残すことを志とした彼の気分と、初燕や空の高さはよく合う。このボールは子規が追ったボールと重なる。

When baseball arrived in Japan, one of the young men who became fascinated with it was Masaoka Shiki. He was the legend who revitalized Japanese haiku. Today, a ballpark honoring Shiki's name stands in Ueno, Tokyo. His spirit—playful in the best sense, aspiring to leave his mark on history—fits perfectly with the first swallow and the height of the sky. This ball overlaps with the one Shiki once chased.

＊ HI 投句作品の選評は、HIA 役員が順番に担当します。

＊ HIA directors will take turns in the selection and review of the haiku.

# 俳句をユネスコ無形文化遺産に

大垣市長　石田　仁

松尾芭蕉が「野ざらし紀行」で大垣を訪れたのは貞享元年（1684年）のことでした。その後、「奥の細道」の旅の終着点として再び大垣の地を踏んだ芭蕉は、この地で旅の疲れを癒し、多くの俳人たちとの交流を深めました。

大垣を旅立つその日、芭蕉は、船町港にて「蛤のふたみに別れ行く秋ぞ」と詠みました。この句には、見送りの人々との別れのつらさと、二見への旅立ちの意が込められており、大垣との別れは芭蕉にとって特別なものであって、当地に対する深い愛着を感じずにはおれません。

大垣と芭蕉の縁は深く、地元の俳人たちと交流を重ね、句会を開くなど活発な俳諧活動を行いました。大垣は芭蕉にとって単なる旅の終点ではなく、俳諧の心を共有できる文化的な拠点でもあったのです。

改めて大垣市は、岐阜県西部に位置し、水の都として知られる豊かな自然と歴史文化が息づくまちです。木曽三川の恵みを受けた肥沃な土地と豊富な地下水により、農業のみならず製造業や情報産業都市としても発展して参りました。現在市内には、奥の細道むすびの地記念館や大垣城、水門川の他、芭蕉ゆかりの史跡も点在し、多くの観光客をお迎えしております。

そうした中、大垣市では、芭蕉翁の精神を受け継ぎ、俳句文化の振興にも力を入れています。毎年芭蕉翁の命日にあたる10月12日前後に開催される「芭蕉蛤塚忌全国俳句大会」は、全国から多くの俳人が参加する伝統ある大会であり、芭蕉翁の遺徳を偲びながら、現代俳句の発展に寄与しています。

また、市内の小中学校でも「俳句教育」を推進しており、20年来、夏井いつき先生をお迎えし、児童に俳句の楽しさを伝える「学校句会ライブ」や、小中学校の先生に俳句の指導力向上を目的とした「教員向け句会ライブ」を行っております。これらは、初心者から熟練者まで、世代を超えて俳句の魅力に触れる貴重な機会となっています。

ユネスコ無形文化遺産への登録を目指す「俳句」は、季節感や簡潔な表現の中に深い情感を込める、日本独自の文化です。

我々、大垣市は、芭蕉翁が愛した水と緑の風景をしっかりと今に伝え、「奥の細道むすびの地」としての誇りを持ち、その足跡を大切に守りながら、俳句文化の継承と発展に努めるとともに、市民の皆様と一丸となって、俳句を通じた文化交流の輪を広げ、芭蕉翁の心を未来へつないでいきたいと思います。

## 『俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会の設立と俳句の定義について』

**筑紫磐井**

二〇一七年一月二十六日、日本記者クラブにて、俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会発起人会（第２回）が有馬朗人国際俳句交流協会会長、稲畑汀子日本伝統俳句協会会長、鷹羽狩行俳人協会会長、宮坂静生現代俳句協会会長その他が一堂に会して開かれ、同協議会を四月十日に設立することを決定した。発起人会後に行われた共同記者会見で、取りまとめ役である有馬氏（協議会発足後は初代協議会会長）から設立の趣旨、俳句の定義について以下の通りの発言が行われた。

協議会設立後年月が経過し発足当初の趣旨が分かりにくくなっているため、今般上記発言を、能村研三俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会現会長、星野高士国際俳句協会会長、井上泰至日本伝統俳句協会会長、片山由美子俳人協会会長、高野ムツオ現代俳句協会会長に手交し、確認させていただいた。

二〇二五年八月

現代俳句協会副会長　筑紫磐井
同専務理事　後藤　章

現代俳句協会では、今後とも有馬氏の発言の趣旨に沿う形で推進協議会が運営されていくという理解の下、引き続きその活動に参加していく。

なおこの機会に、推進協議会発起人会後の共同記者会見における有馬氏の発言内容を録音音源に基づき、以下に正確に再現する。

### １．設立の趣旨

「何故、俳句を無形文化遺産にしたいか、というと私（有馬）が考えていることは、第一に短いということ。五：七：五という定形で世界で一番短い詩形であるということです。

第二に自然を中心に自然の中で共生している人間の生活を詠むということ。つまり、自然と共生する文学であるということです。日本では多くの人が作ったり読んだりしています。そして又、自然を愛好することによって自然を大切にする、それが地球の温暖化を防ぐのに大変重要な役割を演ずるだろうということ。

そして第三に短くて自然と共生することの文学で誰にでも書けるということ。この俳句を日本では極めて多くの人々が作ったり読んだりしています。

俳句の影響で、世界的に三行詩が増えていますけれども、短いが故に今まで詩を作らなかった人も含めて俳句への関心が世界中に広まっていること。その世界に共感者が増えることによってお互いにそれぞれの民族の意志を疎通し合う事、俳句によって疎通する事が出来るようになるということなどです。

そしてやがてはそれが世界の平和につながることを私は考えて、この登録推進運動を進めている次第です。」

## 2．俳句の定義

「五七五を中心とした定型俳句、ただその周辺の山頭火のようなものも或る程度含まれますが、基本的には五七五の定型俳句。そして次に自然と共生して行く、自然をうたう、季語季題を中心に進めて、―もちろんこれも例外、無季があるわけですが。原則としては五七五で季語季題を持つもの、そしてその周辺、その周辺には山頭火が入ったり無季俳句が入ってく、少し広く考えてますが、基本は今申しましたことです。それでよろしいでしょうか。

で、そして少し広くする理由というのはどうしてかというと、中国では漢俳というのがあって、十七字の漢字で作っている。それからアメリカ・ヨーロッパ等では三行詩というのがあって、単語が一行目が三単語くらい、二行目が四～五あって、最後にまた三～四あると。要するに、十個ぐらいの単語でできている短い詩があって、OXFORDの辞書をみると俳句というのは三行詩と書いてあったと思いますね。そういう風に世界では認められているところがありますので、そういうものも行く行く海外で俳句というものを説明してゆく時には、そこまで広げていかなければいけないと思っています。

十七シラブルズの外国俳句もありますけれどもそれではむしろ長すぎるくらいになってしまうことがありますから、三行詩で短詩というふうなものが将来世界で広がってゆくというときに、サポートしたいと思います。

そういう意味で基本的には、繰り返しますが、五七五の定型で、そして季語季題を大切にする、そこで自然と常に向き合って作ってゆく、それプラスその周辺の無季俳句とか非定型も包括して行くという考えです。よろしいでしょうか。」

（『現代俳句』2025年10月号より転載）

〈特別寄稿〉

# 『俳句をユネスコに』

HIA 常務理事　加藤耕子

国際俳句協会の機関誌「HI」2025年168号には二つの特集記事が収載されています。その一つが、「ファンロンパイ（EU 初代大統領）の訪日と俳句ユネスコ登録への足掛りとなる国内の無形文化財登録へのさらなる発展のため、文化財を管轄する文化庁を訪問し都倉俊一長官と面会された記事です。ファンロンパイ氏は、俳句は自然との融和、普遍的価値観などに根付いたもので、その精神は世界平和へもつながり現代にこそ必要とされると述べ、さらにこの短詩型は、母国ベルギーをはじめ世界中で詠まれている。また俳句ユネスコ登録の発起人のひとりである故有馬朗人氏の遺志を継いで、俳句を無形文化財登録へさらにはユネスコ登録へ導きたいとの思いを吐露した。一方、都倉長官は、国内での無形文化財登録の先にユネスコがあるが、ファンロンパイ氏のような国際人が俳句交流大使の任に当たられていることに敬意を表し、この面会を機に文化財登録への検討を最優先課題として取り組みたいと語った。（ファンロンパイ氏はすでに EU 代表としてノーベル平和賞を、日本では、岸田文雄元総理大臣より日 EU 俳句交流大使に就任されている。）以上ファンロンパイ氏訪日に関する執筆記事四氏の抄録。都倉俊一長官のファンロンパイ氏への言葉に大へんうれしく感動しています。

もう一つの記事は、料理研究家土井善晴氏の料理へのお話。

「台所は地球と繋がっているのです。そういう意味で、自然を思い、家族と自然を思うこと」「食事とは、喜びであり幸福です」「それは自分の意志でする料理です」「私たちの喜びは自然とともに生きて来た私たちの本当の豊かさだと思います」。

抜書きですが、最後の「自然とともに生きて来た私たちの本当の豊かさ」とは、このことこそご先祖様から生き方として受けついで来た生活文化・文化遺産そのものと私は思います。「私たち自然と共に生き、内なる自然とむすぶことで喜びを知る。心豊かな文化があるのです。」俳句も料理、日常の日本料理同様に、自然と共にあり、自然の景の奥にあるものの生命にふれた時の感動・感応がことばとなって文字という形になって表われる。心のはずみが五七五のリズムに乗る時、私達は幸福な気持につつまれます。私は、土井氏のお父様の時代の人間ですからいつも土井式料理をたのしく学んでおりました。今も、自然の力発酵調味料の薄味を私の好物と思って居ります。羅臼昆布を本節でとった「だし」が一番おいしい食材・食べ物と思っています。

俳句ユネスコ無形文化遺産登録推進協議会の一員として登録の日の近いことを期しています。

（『耕』2025年11月号転載）

会員エッセイ

## 『ルーマニア大使館の「俳句の夕べ」』

**向瀬美音**

10月26日、ルーマニア大使館で「俳句の夕べ」が開催されました。きっかけは私が編集した『俳句ガーデン　秋の歳時記』を大使に贈呈したら、その中の作品に惹きつけられ、またルーマニアの俳人の優秀な俳句を目にしてこの企画を提案してきました。

ルーマニア、またその他の国々と Zoom で繋がって句会をするという斬新な手法で行いました。Zoom 画面には30人の海外の俳人、ルーマニア大使館内の会場には30人ほど日本の俳人が集まりました。事前に寄せられた海外の俳人の俳句は60句ほどあり、それを中野千秋氏が丁寧に日本語に翻訳して準備しました。外国の俳人が自分の句を母国語で読み上げ、千秋氏が日本語で朗読する形をとりました。その後、会場内の各俳人が特選、入選句を発表し、Zoom 参加の方々にも伝わるようにいたしました。初めての体験だったので完全とは言い難いですが、国際俳句にとっては新しい試みといえます。

ここに日本の俳人の方々の特選を載せようと思います。

母が見る秋は鏡の中にあり　Florence Muhlebach（フランス）　木村聡雄選

風が葉を拾ひてパズル完成す　Claudia Ramano Codau（ルーマニア）　五島高資選

雨音や鍵盤をゆく秋の雲　Daniela Topîrcean（Dana Top）（ルーマニア）星野　愛選

難民キャンプ隼は自由なる　Angela Giordano（イタリア）　名取里美選

ブラウスの下に白鳩空の旅　Cristina Fierbinteanu（ルーマニア）　歌代美遥選

戻らないページに挟む色葉かな　Daniela Misso（イタリア）　浅木ノエ選

秋の声産声上がるテント村　Angela Giordano（イタリア）　杉　美春選

街明り白き寒気がドアノブに　Clerlia Ifrim（ルーマニア）　内村恭子選

蟋蟀やジャスミンの香が庭満たし　Nicoleta Şurpan（ルーマニア）藤本はな選

扇開きルーマニアと日本にかかる虹　Elena Zouain（ルーマニア）
オヴィディウ・ラエツキ大使選

ぶらんこを漕いで子どもは月に触れ　Dennys Cambarau（イタリア）
秋日差す蝶はその影踊らせて　Nadine Léon（フランス）　向瀬美音選

椅子二脚ひとつの毛布分ける夜　Rashmi Mohapatra（アメリカ）
一瞬の胸の高鳴り桜咲く　Eugenia paraschiv（ルーマニア）　中野千秋選

選句後、ルーマニアワインが振舞われ、和やかな懇談の時を過ごしました。

この句会にはルーマニアから駆けつけて参加した俳人もいます Claudia Ramano Codau さんです。問題点を改良してまた半年後あたりに第２回国際俳句ズームを行いたいと思っております。

## 後 記　中東欧における俳句の広がり
## ――第27回 HIA 俳句大会とルーマニア大使館イベント後援

本号の特集は第27回 HIA 俳句大会である。日本語部門の様子は各賞や各選者の方々の選を通してご覧いただける通りだが、外国語部門も各国から466句の投句があった。アメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、オランダなど常連の国々やインド、イラン、UAE、ガーナ、アルジェリアほかの国々に加え、以前にも増して中東欧の国々からの投句が目立った大会であった。その国々をいくつか挙げてみると、クロアチア、ルーマニア、ポーランド、ブルガリア、ハンガリー、セルビア、チェコなどがある。なかでも特に投句数の多かったのはクロアチアであった。理由についてここで正確に説明することは難しいとはいえ、確かに以前から俳句が盛んだったことは知られるところである。たとえば前に本協会の賞に輝いた俳人が同郷の俳句仲間たちに声をかけて輪が広がって行く様子も想像できるだろう。そういったことがあるなら、まさに本協会のめざす世界の俳句交流が実践されている実例とも言えそうである。これからも国内外とも一層多くの俳人の方々に投句していただけるよう努めて行きたい。

東欧のなかでも南寄りの国のひとつがルーマニアである。10月26日、日本とルーマニアとの俳句交流の会「ルーマニア大使館　俳句の夕べ」が催された。本協会も現代俳句協会国際部とともに後援し、本誌『HI』での告知により会員を中心に三十名ほどにご参加いただくことができた。オヴィディウ・アレクサンドゥル・ラエツキ駐日ルーマニア大使による開会のご挨拶で幕が上がり、向瀬美音氏の挨拶へと続いた。木村聡雄は会の司会のほか、「俳句がつなぐ世界」と題する講演を行なった。講演の概要は、歴史を振り返りながら俳句こそ二十一世紀の世界を繋ぐ短詩形であるということで、大使からも俳句の重要性を再認識したという言葉をいただいた。この後 Zoom 参加のルーマニアを中心としたヨーロッパ俳人二十数名の方々が、中野千秋氏の進行で原語による自作句を披露された。日本人参加者は和訳資料をもとにそれぞれにお気に入りの一句を選び、五島高資氏と木村聡雄の評で会が締め括られた。大使は閉会の辞で、日本との俳句交流をさらに続けたいとお話され、ルーマニアワインでの交流会となった。ヨーロッパと日本をリアルタイムでつなぐ新たな形の句会となった。

木村聡雄

HAIKU INTERNATIONAL No.169

| | |
|---|---|
| 定　価<br>Price | 1,000円（含年会費）<br>年会費10,000円 |
| 発行日<br>Date of issue | 令和７年11月30日<br>November 30, 2025 |
| 発行人 | 星野高士<br>HOSHINO Takashi |
| 発行所<br>Publisher | 国際俳句協会<br>HAIKU INTERNATIONAL ASSOCIATION |
| 住　所<br>Address | 〒162-0843<br>東京都新宿区市谷田町２-７東ビル７F<br>7F AZUMA BLDG. 2-7, ICHIGAYA TAMACHI, SHINJUKU-KU, TOKYO 162-0843 JAPAN |
| 電　話<br>Fax | 03-5228-9004<br>03-5228-9007 |

| | |
|---|---|
| 表紙書<br>cover calligraphy | 町　春草<br>MACHI Shunsō |
| 翻訳委員<br>translator | 村上　博幸<br>MURAKAMI Hiroyuki |

送金口座名「国際俳句協会」
ゆうちょ銀行 振替貯金　00190-1-536945
三菱ＵＦＪ銀行 新丸の内支店（普）1028936

一般会員：１万円
賛助会員　結社、団体：３万円
法人：１口10万円
（何口でも可）

ホームページアドレス　https://www.haiku-hia.com
俳句ユネスコホームページアドレス　https://unesco.haiku-hia.com
協会メールアドレス　info_hia@haiku-hia.com